



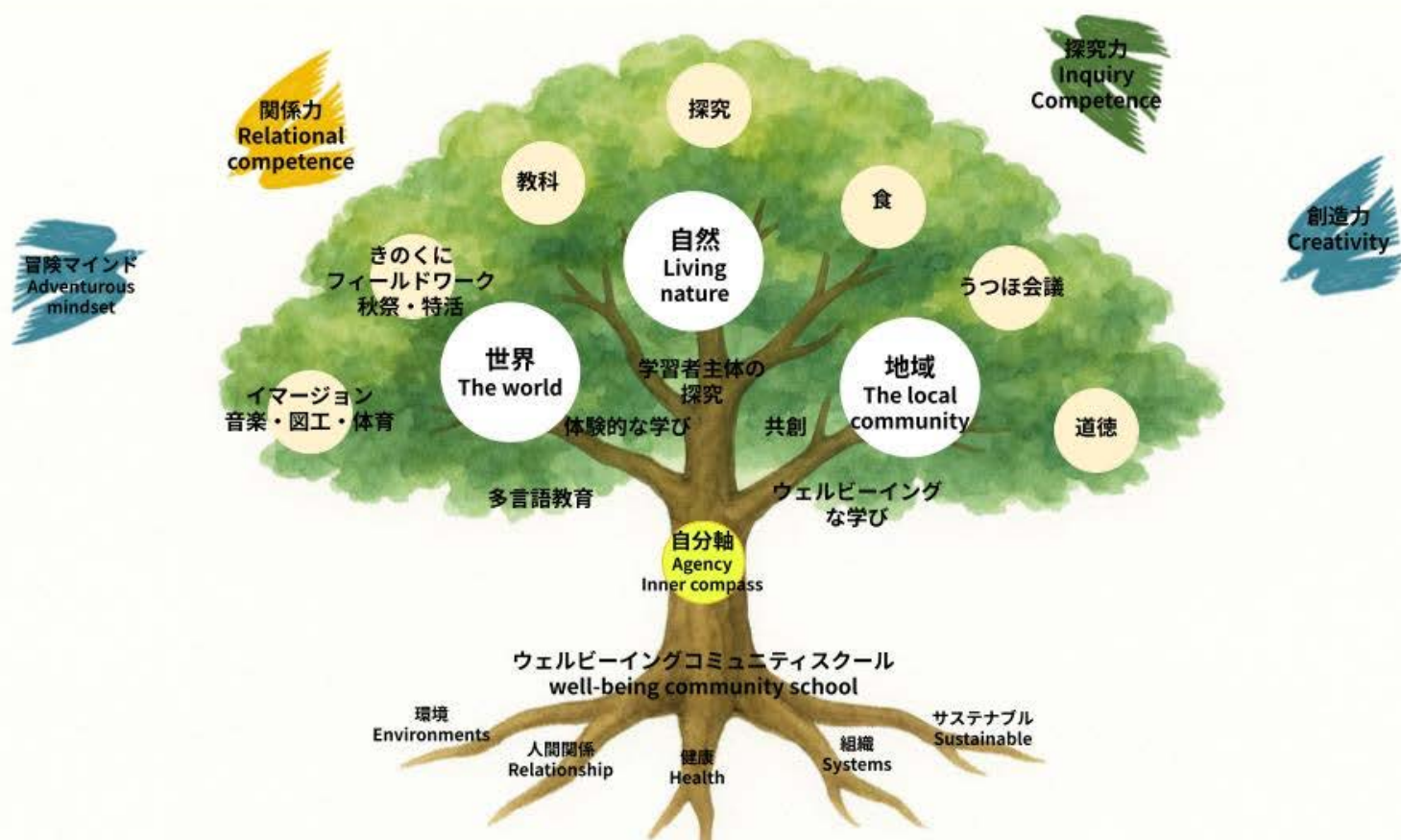
うつほの杜学園訪問報告雑感 — 2025年10月27日

笹島茂 CLIL-ite理事長

2025年度からスタートしたうつほの杜学園(Utsuho Academy)小学校は、和歌山県田辺市中辺路町にあります。最近では熊野古道として多くの観光客が訪れる歴史ある自然豊かな地です。4月ごろに学園のスタートを聞いてから一度は訪問したいと思い、今回訪ねてみました。CLIL-iteの理事をお願いしている森田琢也先生が主体的にかかわり、CLILを推進していると聞いていたからです。趣旨は、微力ですが、何か支援できることはないかということで、訪問しました。その報告と雑感です。

学校の詳細は、<https://utsuho.ac.jp>をご覧ください。理念も構想もすてきな学校です。IB(国際バカロレア)PYPも申請中で数年後にはIB校となるそうです。子どもたちが自然に英語を身につけられるように、日常的に英語にふれる環境を整えているということです。この考えにはCLILの視点が反映されています。カリキュラムは、英語の基礎力をしっかりと育み、

音楽・図工・体育などの教科学習の中で日本語と英語を使いながら、教員が生徒といっしょになって学ぶということが、基盤となっています。これも、CLILの理念に沿った考えで、学びという観点からとても意義深い教育を目指していると理解しました。



この図がうつほの杜学園の教育をよく表しています。単に英語力を育成するだけではなく、学校全体で、学びに取り組むことがCLILの教育でも理想的なことで、私自身もこの点が一番大切と考えていて、大いに興味があります。実際に訪れてみると、CLILの理念と共通することがあちらこちらに取り入れられていました。私から見れば、状況や文脈に即したCLILの一形態だと見えます。「CLIL」という用語を表向きには出さず、この図では「イマージョン」と言っています。理由を尋ねるとシンプルで、CLILは馴染みがないからだそうです。しかし、このようなことはあちらこちらで起きている。用語についてのこだわりはそれほどありませんが、大切なこ

とは、子どもたちが何をどう学ぶかです。数年経って、CLILという言葉が学校の取り組みの中に浸透し地域社会で理解されてほしいとは思いますが、うつほの杜学園の理想が具現化されることを願います。



CLIL教育の発展と普及に携わるCLIL-ite（NPO法人CLIL教員研修研究所:CLIL Institute for Teacher Education）の理事長として、CLILの観点からうつほの杜学園の学びの様子をここで報告しふりかえり、多くの人に関心を持っていただきたいと考えます。

1. CLILの理念に適う学び



うつほの杜学園に到着して、学校を見てすぐに思いました。快晴の天気の子のせいかもしれませんが、「豊かな自然に囲まれ学びにはいい場所だ」が率直な感想です。現代社会ではある面で危険かもしれませんが、学校という垣根が低く、社会に開かれた学びの空気が感じられました。学びに安心・

安全は欠かせません。この点は、あまり言及されることはありませんが、CLILでは基本だと考えています。CLILは「英語で学ぶ」場面をもちろん含みますが、「英語だけで学ぶ(English only)」ではありません。無理をしない、不自然である学びをしないことが大切です。基本は統合学習(integrated learning)です。内容と言語をどう統合するかがカギです。

じかんわり
時間割

8:50-9:05	Switch Time
9:05-9:10	朝の会
9:15-9:55	1時間目
10:05-10:45	2時間目
10:55-11:35	3時間目
11:45-12:25	4時間目
12:25-13:10	給食・昼休み 12:35 いただきます 12:50 ごちそうさま
13:10-13:20	そうじ
13:25-14:10	5時間目
14:20-15:05	6時間目
15:05-15:15	帰りの会
16:15	バス出発

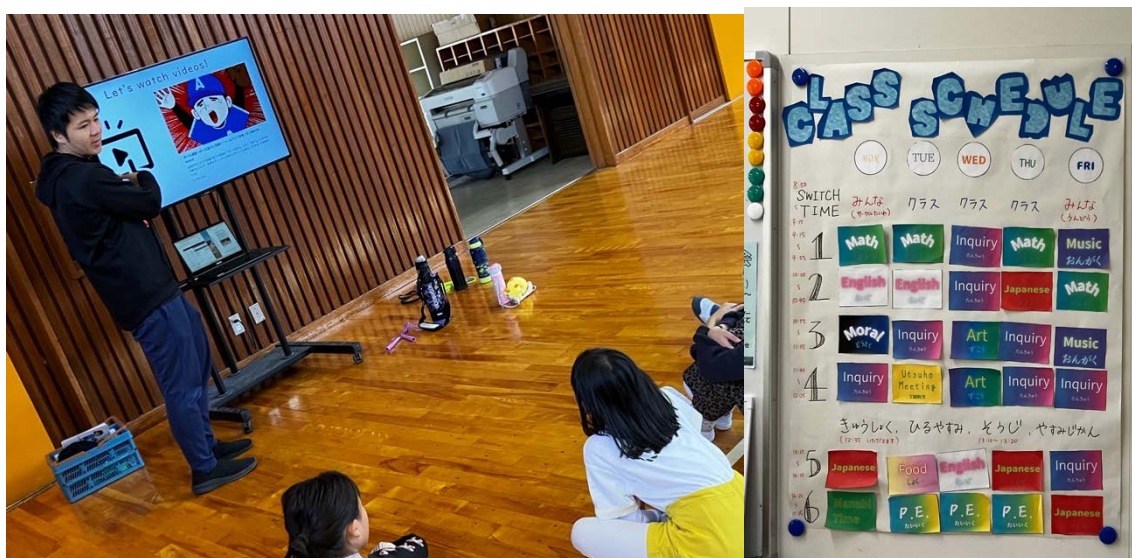
20数年前からヨーロッパの学校を回って、学びの実践を見てきました。その中でCLILに出会うときに感じたことは、CLILを推進している人の多くが柔軟で多様で、私のような外部のものでも自然に受け入れてくれました。バイリンガル、イメージョン、内容重視の言語指導などとの違いは、あまり気にしません。「これはCLILです」「あれはCLILではない」などという議論はしたことがありません。生徒もそうです。CLILであろうがなかろうが、学びがおもしろければ問題ないわけです。英語も、彼らがふだん使う言語も、意味に集中すれば関係ないのです。このような態度が自然に身についていることがCLILの最大の利点です。うつほの杜学園の学びの

The photograph shows a classroom calendar and a child's drawing. The calendar is titled "じかんわり Class Schedule" and displays a weekly layout. The days of the week are listed in Japanese and English: 月 (Monday), 火 (Tuesday), 水 (Wednesday), 木 (Thursday), 金 (Friday). The calendar includes various activities and events, such as "Manabi Time" and "Manabi Time". The child's drawing is a piece of paper with Japanese text and a small illustration of a person.

5

2. 自然な言語の使用

CLILが英語教育として浸透しているのが日本の状況です。ある人はそれをsoftあるいはlanguage-driven CLILと言います。その分類で言うと日本の状況ではCLILはそれに当たります。英語授業でも自然な英語の使用はsmall talkなどと言われ有効とされています。私もそう思います。が、英語の使用は小学校低学年ではやはりむずかしいでしょう。内容を制限し、理解を図るための技術が必要です。しかし、自然に英語を使うのは、多くの場合、内容を簡単にする必要があるので、結局不自然になります。そのために、歌、ゲーム、発音、アルファベット、単語などの学習に集中します。それと日常のコミュニケーションは両立しません。当然日本語が使われることが自然になります。



今回うつほの杜学園では英語の授業は見られませんでした。タイミングの問題だから仕方ありませんが、見る必要も特にありませんでした。他の授業の様子でほぼ学びはわかりました。少人数としてのメリットもあるでしょう。各授業の日本語使用も自然でした。おそらく英語もそうだと思います。それはCLILとして展開している体育の授業を見てわかりました。英語使用の頻度が少なかったとしても、CLILとして自然に英語を使い、縄

跳び(jump rope)とボール投げ(throwing)をCLILとして学んでいました。授業では、先生が必要に応じて英語を使い、それを子どもたちは自然に受け入れて、英語を自然に吸収していました。学校全体でCLILを推進しているので、子どもたちは英語を受け入れる態度がすでに備わっているからでしょう。これは、CLILを展開する上でとても重要です。いわゆるレディネス(readiness)ができています。数年経てば成果は必ず出てくると思います。

3. 内容や意味に焦点を当てた学び

現状ではCLILは広い意味で英語教育の一部です。が、子どもたちの学び自体は、それとは関係なく何かの内容や知識や思考に向かっているのがふつうです。子どもたちが学校に求めるものは、当然ながらそのような学びに向かう志向があるからです。学校にそれがなければ学校の意味がありません。不登校が増えている原因の根底にはそれがあります。学校に行かない子どもには行かない意味があるからです。彼らには現状の学校には無意味に見えるし魅力もないのです。うつほの杜学園には意味があります。

南アフリカ共和国のケープタウンに行って、あるふつうの小学校に行ったことがあります。その学校に登校している子どもたちは、狭い教室に40人ほどで理科を英語で学んでいました。日本と較べると環境が決してよいとは言えませんが、熱心に学んでいました。子どもたち全員が英語ができるわけではないので、先生は英語と現地のアフリカ語(Xhosa)で教えています。教科書は英語です。学校に来ている子どもたちはある程度恵まれています。来られない子どももいます。彼らは**学校に来る意味**を持っているわけです。学びに活気があるという印象が強く残りました。

誰にとっても意味のないことをするのは無意味でおもしろくありません。その点から、うつほの杜学園で私が見た子どもたちがしているすべての活動は、学びにつながり、何かの内容に焦点が当たっていたように見えまし

た。むしろ失敗を経験して学んでいることのほうが多かったかもしれません。しかし、失敗してもうまくいかなかったとしても、先生や友達といっしょに何かを学んでいました。授業だけではなく、給食、休み時間、放課後など、すべてが**自律的な学習の基礎**となっていたように思います。これはCLILの理念である「4つのC」と自然につながっています。無理しなくても、上図のうつほの杜学園の教育の木のように子どもたちは育っていくのではないかと思います。

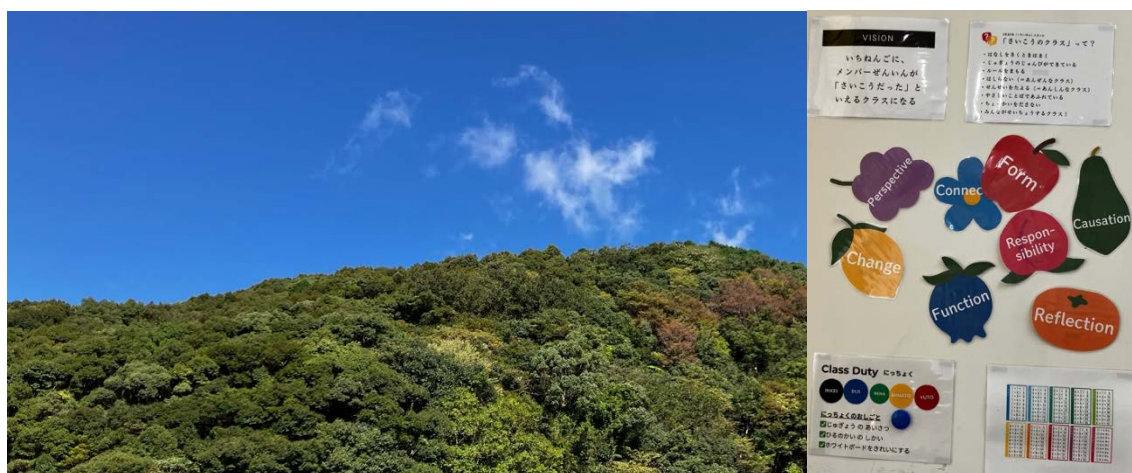
4. 学習者やCLILを支える環境

学校を訪ねて授業を見ているといつも思いますが、授業だけでCLILを実践し成果を出すのはとてもむずかしいと感じています。一人の先生がCLILを授業で取り組んでも、その授業外でそれが生かされないのでは、効果は薄いでしょう。しかし、**学校全体でカリキュラムとしてCLILを展開**することはむずかしいですが、やりがいがあり効果的だと思います。バイリンガル教育、イマージョン、IBなどなどは、カリキュラムとして実践するのが主流です。それなりの成果を世界中で示しています。個人的な印象では、ますますその傾向は顕著で、教育の主流となっています。

日本の英語教育での様々な取り組みが日本でうまくいかないのは、カリキュラムがそうになっていないことに主たる原因があると考えています。学習指導要領、教科書、教育課程などの枠組がCLILを排除している場合は、CLILの利点を活かすことは困難です。学校の方針やカリキュラムに、CLILなどの統合学習の理念があり、学習者の自律を尊重する姿勢があり、多言語多文化などのグローバル社会で活躍する構想があり、それをもとに教師が協力し、学習者がCLILなどの多様で柔軟な学習を理解する環境があれば、CLILと言わなくても自然にCLILになります。その結果は、グローバルであっても、ローカルであっても、それが統合された結果(outcome)が自然に子どもたちの学びに反映され、**学習者の自律(learner autonomy)**という目標は達成されると考えます。

CLILでは「4つのC(4Cs framework)」がよく言及されます。内容 (content)、思考(cognition)、コミュニケーション(communication)、文化(culture)という理念や指針のことです。これはよく誤解されるので、ここでも強調しておきたいと思いますが、「4つのC」があればCLILということでもなく、CLILに「4つのC」が絶対必要だということだとは、私は理解していません。提唱したDo Coyle氏もそうは言っていません。単なるガイドラインです。しかし、Coyle氏は、その「4つのC」にもう一つCを加えています。それは状況・文脈(context)です。

CLILはあいまいな学習理念なのです。ヨーロッパでも「4つのC」を知らない先生もたくさんいます。それほどきちんと考える必要はないのです。が、個人的には私は「4つのC」が好きで、私自身の指針として学びを考える際に「4つのC」を利用しています。ただそれに固執することはありません。CLILの環境を整える意味で価値がありますが、どれかが欠けていたとしても気にしません。学びの本質とはそういうものです。



以上、1) CLIL の理念に適う学び、2) 自然な言語の使用、3) 内容や意味に焦点を当てた学び、4) 学習者や CLIL を支える環境、という4点について、うつほの杜学園での生徒の学習をふりかえりました。先生やゲストの人が真摯に子どもたちに向かい、彼らの学びを支援する様子は、必

ず大きな実をつけますと思います。その実は有名大学に入学するとか、国際社会で活躍するとかいうことではないかもしれませんが、よい人生を送れる教育を子どもたちに提供していると実感しました。今後が楽しみです。

うつほの杜学園の実践は、CLIL-ite の活動として今後も支援していきたいと考えています。ぜひお時間のある方は、うつほの杜学園を訪ねてください。そして、子どもたちや先生と話してください。きっとよい時間を過ごせると思います。



私は、小学校1年生といっしょに給食（ラーメンとデザート）をいっしょに食べました。それぞれの子が熊野に暮らしていて幸せそうでした。食事

中に 500 円玉を落としたら、ある生徒が親切にも「おじいちゃん、落としましたよ」と届けてくれました。みんな優しい顔をしていました。授業では、小学校 2 年生の子どもたちは、SDGs の活動についてオンラインでむずかしい話を真剣に聞いていました。子どもだからと言って馬鹿にしていけないなと思いました。小学校 1 年生が算数の問題のドリルをしていました。算数が得意でない子が悩んでいると、周りの子が熱心に教えてくれて、わかったらニコッと笑っていました。小学校 3 年生の体育の授業では、CLIL を取り入れていました。ある生徒が縄跳び (jump rope) の縄回しは何回もうまくいかないのが納得いかなくて、不思議そうに「なぜなんだろう?」と考えていました。子どもたちは、放課後になっても学校に残って、勉強をしたり、先生を追い回したり、ゲームをしたり、本当にいい時間を過ごしていました。こんなに貴重な時間をゆったりと過ごせる（熊もいるそうですが）学びの場であれば、不登校も問題にならないのではないのでしょうか。

森田琢也先生は、みなさんも知っているとおり、CLIL の実践では素晴らしい指導者です。関西で CLIL に早い段階から関心を持ち、高校で英語教育や CLIL の発展に貢献してきました。その経験をもとに、**うつほの杜学園**の構想に関わったようです。構想から実際にスタートするには何年もかかったそうですが、なかなかできることはありません。**うつほの杜学園**はスタートしたばかりですが、今後は小学校だけではなく、中学校にまで広げていくそうです。地域や大学や経済界からも支援を受け、「**いっしょに学ぼう、創ろう、冒険しよう**」という理念のもとに独自の教育を推進しようとしています。CLIL という言葉を出していませんが、CLIL を研究し実践している J-CLIL のメンバーの方にはぜひ応援してほしいと思います。

私自身は、**うつほの杜学園**が CLIL を全面的に打ち出して特色のある教育を推進していただきたいと思いますが、学校経営となるとそれほど単純なものではありません。子どもたちにとっても CLIL ありきで日々の教育をするわけにはいきません。J-CLIL (日本 CLIL 教育学会 : the Japan CLIL

Pedagogy Association)の目的は、「CLIL(Content and Language Integrated Learning: 科目内容と言語を統合した学習)あるいは CBLT (Content-based Language Teaching:内容を重視した言語指導)等の統合教育に関する研究と実践を推進する」です。CLIL-iteの事業目的は、「CLIL (内容と言語の統合学習)に関心のある教育全般に携わる人に対して、CLIL 教員研修プログラム(CLIL Teacher Education Program)の開発と運営に関する事業を行い、CLIL 教育の発展と普及に寄与すること」です。二つの団体を作ったのは、私です。これからの人が生きていく上では、CLIL が比較的望ましい学習だと考えているからです。英語はその有効な手段です。しかし、英語だけ学習しても価値はありません。その先を見ていく必要があります。うつほの杜学園は私にはその先をよく見ているように思います。

ぜひ応援しましょう。CLIL-ite (<https://www.clil-ite.com>)は応援します。

